

# 琵琶湖だより

写真「鳥丸半島の鳥シリーズII」  
アオサギ



## 田んぼの魚のことを知っていますか？

琵琶湖では、近年、湖国名産フナズシの原料であるニゴロブナをはじめ、ボテのような普通の魚まで多くの在来魚が姿を消しつつあります。このことは、琵琶湖魚類にかかわる漁撈、食、祭りなど湖国の固有文化の存続にとって、たいへんゆゆしき問題と言えるでしょう。琵琶湖の魚が減った原因には、彼らの生育・産卵環境の劣化、外来魚の繁殖による捕食や競争、漁獲圧の増大、水質環境の悪化などが挙げられます。魚類が減った原因は、おそらくこれらのことが複合的に作用した結果と考えられます。私は、ここ10年ほど田んぼがもつ魚類の産卵場、育成場としての機能に着目し、田植え時期に湖から水田地帯へ産卵にやってくる魚を調べてきました。また、田んぼにニゴロブナ親魚や孵化したての仔魚を放して、どれくらい育つかを調べてきました。

調査の結果、次のようなことが明らかになりました。水田地帯には琵琶湖にすむナマズ、フナ類、コイなどが侵入し、いずれもそこで繁殖していること、また、場所によってはドジョウ、タモロコ、メダカなどが増えていること、さらには、水田にニゴロブナを放した水田1筆では、4万尾を超える稚魚が、琵琶湖の中よりも大きく育つことなどです。30～40年前には、琵琶湖周りの水田地帯が魚類のいわば“ゆりかご”として大切な役割を持っていたことは、今更ここに記すまでもないでしょう。そんなことは、かつて琵琶湖畔に住んでいた方たちにはごく当たり前のことだったからです。ところが、今日では魚が入れる田んぼはごくわずかになってしまい、さらには、水田地帯にやっ

てくる魚も、なぜかナマズばかりが目立つようになってしまっています。かつて多かったとされるフナ類やコイは、ごくわずかしは見られないのです。

当館では、「水田で産卵する魚たち」（水族展示）や「琵琶湖の変化」の状況（湖の環境と人びとの暮らし）などの展示コーナーで、こうした琵琶湖の変化を紹介しています。身の回りの生きもの（自然）と私たち（ヒト）の関係を考えるためのひとつの材料となれば幸いです。

（上席総括学芸員 前畑政善<sup>まさよし</sup>）



水田で育ったニゴロブナ稚魚



ナマズ追尾中



田んぼのナマズ仔とフナ子

# 里山体験教室

里山は、人によって長い歳月をかけて農耕や林業、放牧などの利用を続けてきたことで形づくられた空間です。そこには、二次林や水田、ため池、草地といった多様な環境がモザイク状に存在し、多様な動植物のすみかともなっています。

人の暮らしを支えてきてくれた里山ですが、近年逆に人が入らなくなったことや、宅地開発、伝統的な営みの放棄、外来種の侵入といった要因で、里山の生物多様性は劣化してきました。

琵琶湖博物館では、里山の環境や空間が身近に残っていることの意味や大切さを多くの方に体感してもらいたいと、地域での活動として「里山体験教室」をこの10年あまり開催してきました。

体験教室では、使われなくなった里山を継続的にお借りして、「はしかけ里山の会」のメンバーと博物館スタッフが一緒になって、雑木林の手入れや里山での遊びを通して、里山の魅力や楽しみを多くの人々と共有する場となるように心がけています。また、雑木林の整備だけでなく、春は山菜、夏は昆虫、秋はキノコ、冬はたき火と四季の醍醐味を体験して、里山の素敵さを感じてもらえる活動を続けています。

そして、里山を使うことから里山に関心を深めてもらい、それぞれの人にとっての「新しい里山物語」を描いてもらえたらと思っています。

この春にも、新たな里山体験教室の参加者を募集します。ご関心のある方は是非ご応募ください。詳しくは、琵琶湖博物館の広報資料やホームページをご覧ください。

(専門員 寺尾尚純なのおすみ)



写真

- ① 春の野草のテンブラ 美味でした
- ② 夏の里山 木陰でハンモック
- ③ 秋の里山 雑木林の整備
- ④ 雪の里山 やっぱたき火でしょう

第24回水族企画展示 2011年4月29日(金・祝)～9月4日(日)

## レッドリストの魚たち

※常設展示観覧料が必要となります。



セタジミ



イチモンジタナゴ

場所：水族企画展示室 主催：琵琶湖博物館

2010 年度改訂の「滋賀県で大切にすべき野生生物」に記載されている淡水魚と淡水貝を紹介します。

ギャラリー展示 2011年4月29日(金・祝)～6月12日(日)

—古琵琶湖の化石 奥山茂美コレクション寄贈記念—

## 化石が語る 350万年前の生きものたち

ミエゾウ白歯



場所：企画展示室（観覧無料） 主催：琵琶湖博物館

伊賀盆地の化石を精力的に収集・研究されてきた奥山茂美氏の化石標本を中心に、約350万年前の古琵琶湖周辺の生きものたちを紹介します。

今号の「田んぼの魚」や「里山体験」にあるように、琵琶湖や里山の生きものの「にぎわい」が戻ってくることで、くらしの「にぎわい」が豊かになればと思います。

### 編集後記

これまでは、利便性や効率などのモノサシを優先して、くらしや社会に必要なと考えられる「もの」づくりが進められてきた気がします。しかし、「もの」の価値は、市場でつくられるのではなく、個人の自覚的な判断にあるのだと思います。

### ◆巻頭写真の説明

日本にすむサギの中で、最も大きいのがアオサギです。琵琶湖岸や河川、田んぼの水路などでじっとたたずみ、魚、カエル、ザリガニなどを食べます。待ちぶせ型のえさのとり方をするので、同じ場所で長い時間動かずにいる姿を見かけることも多い鳥です。他のサギ類やカワウなどと同じように、集団で木の上に巣を作り、子育てをします。

### ● 鳥の目 魚の目 クイズ ●

#### 「アオサギについて」

Q アオサギは、どのようなえさのとり方をするでしょうか？

- ① 歩き回りながらえさをとる
- ② 水にもぐってえさをとる
- ③ じっと待ちぶせをしてえさをとる

答えは、紙面のどこかにあります。

